

収穫は多いが・・・

近藤 十郎	同志社女子大学宗教部長 現代社会学部教授
奨励者紹介【こんどう・じゅうろう】	【研究テーマ】 宗教の人間学的研究

イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」（マタイによる福音書 九章三五-三八節）

はじめに

「愛されていない人はいない。尊ばれない命はない」。
瀬田の唐橋（近江八景の一つ）近くに西光寺というお寺がありますが、その門前にしつらえられた案内板に書かれていた言葉です。いつもであれば「何か書いてあるな」とは思いつつ、車で通り過ぎてしまうのが常でしたが、その日は何となくこの言葉が気になって、運転のスピードが鈍り、すぐ後ろについてきたドライバーから警笛を鳴らされてしまいました。看板の言葉は、おそらく月替わりか何かでお寺の和尚さんが、これぞと思った言葉を書いておられるのでしょうね。同じ看板でも、読む人は読み、見る人は見ているものですね。和尚さんのお人柄を知っている檀家の人たちならば勿論のこと、たとえ通りすがりであっても、意識的に読んで心に留めている人びとも、あるいは少なからずあるのかもしれない。
「愛されていない人はいない」。なるほど、そのとおりです。当たり前といえばごく当たり前のこと。この世に生まれて愛を知り、愛されていることを当然のこととして確かめることができること。私たちの生きる時代が、このことを自明なものとして受けとめることができれば、なんとハッピーなことでしょうか。しかし、私たちの現実はどうか。「私」という存在が、現代の文脈において、「私」を囲む周囲から愛の対象として確実に認識されているかどうか。改めてこの問いを自らのうちに問いかけてみると、はなはだ心許ない、そのようなある種のためらいを感じている人びとは、決して少なくないのではないのでしょうか。じつは、愛の問題について、当然のことが当然でない、自明であるべきことが自明ではない時代に、私たちは生きているのです。
「尊ばれない命はない」。これもまた、そのとおりです。言わずもがなの真理です。そうありたいものです。命が尊ばれていること、命の重さが約束され、保証されていること、これが人間存在の意味を規定する、ということも確かです。しかし、私たちの生きている現実はどうでしょうか。尊ばれているはずの命が、命の問題が、あまりにも軽々しく扱われ、ふさわしく尊ばれていない現実を、私たちは今や、いやというほど知らされています。
問題は、じつに深刻かつ緊急です。現代を生きる私たちの課題は何か。愛することが自明なものとなり、命の重さが差し引きなしに認められ、尊ばれる世界を実現すること、そのような課題を実現するための試みが、真剣に、また誠実に続けられるべきでしょう。

飼い主のいない羊のように・・・

新約聖書のマタイは、時代を生きていた「群衆」の実態を次のように表現しています。

イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。
（マタイによる福音書 九章三五-三六節）

「飼い主のいない羊」は、行く先を知らず、迷い、渇きとひとじさのために痛み苦しんでいます。いったんどう猛な狼や野獣に狙われれば、自らの命を守るすべもなく、食い殺されるばかりです。荒れ野や砂漠を生き抜くための生への本能的防御力は、羊たちには残されていません。羊たちを緑のオアシスに導く羊飼いがいなければ、どうして彼らが、荒れ野を生き延びることができるのでしょうか。
「弱り果て、打ちひしがれている」群衆の有様を描写するために、福音書の著者たちは、社会の底辺に置かれて、差別や抑圧に苦しむ人びとの姿を、さまざまな具体例をあげて示しました。マタイは、当該テキストの直前（マタイによる福音書 九章三二-三四節）で、「悪霊につかれて口の利けない人」の癒しの物語を取り上げています。「悪霊」とは、詰まるところ、人間を非人間化する諸々の霊力を意味します。口の利けない人を悪霊の働きの結果と断じて裁き、悪霊の及ばない自分を正当化してしまう人間の非情さ、残酷さを思わされます。苦しむ者の苦しみを共有することなく、痛む者の痛みを理解しようとしない人間の現実とは、昔も今も同じです。癒しの物語では、イエスの癒しの働きに対して、ファリサイ派の人びとはその行為を「あの男は、悪霊の頭で悪霊を追い出している」、と言って非難しました。口の利けない人が口を開いて神を讃美する姿に、驚きと共感を覚えるべきであったのに、イエスがその愛の働きを苦しむ者への共感として実践されたことへの敬意や讃美は、残念ながらファリサイ派の人びとからは出てこなかったのです。奇跡の魔術的癒しそのものが問題だったのではない。苦しむ者・痛む者への共感、ということが、主イエスの福音の本質を語ろうとするマタイの意図であったことは、言うまでもありません。

現代人の病

マスコミやその他の各種メディアにおいてよく指摘され、その問題の深刻さが叫ばれている問題の一つに、日本における自殺率の上昇、という問題があります。一九九八年以降自殺者は三万人を割ったことがない。未遂者は、少なくともその十倍はあるとも言われています。仮に年間三万人の自殺者があるとすれば、一日につき単純計算でも八十二人にもなる。ネットによる集団自殺も、同時多発的に発生している状況もあります。自殺を請け負う人物さえあり、報酬を出してもこれにアクセスして自殺を実行する人の話も、つい最近の話です。命の重さ、かけがえのなさ、というものが、現代を生きる私たちの世代にどれだけ認識されているのか、と改めて考えさせられるこのごろです。豊かな時代、飽食の時代を生きながら、若者たちが自らの未来を自分で断ち切ってしまう。そうした行為を短絡的で意味のないもの、と傍観的に断じてしまうことが許されるのかという問題もあるでしょう。この社会のありようについて、そこに生きる人間が、私たちがどのように自らの生き甲斐を創造していくのか、無意味にみえる「生」を、いかにして意味のあるものとして創造していくのか。自らの「生」がいとおしく意味あるものと信じることができさえすれば、他者と隣人への対応の仕方についても、おのずと明らかになってくることでしょう。

収穫は多いが、働き手が少ない

主イエスは、「収穫は多いが、働き手が少ない」（マタイによる福音書 九章三八節）と嘆かれました。現代人の置かれている状況が厳しければ厳しいほど、自分自身も含めていたく傷つき、苦しむ人びとの痛みが共有できるような「働き手」が、幅広く求められます。この時代にこそ、そのような「働き手」を求める主の招きに応える器が必要です。幸いなことに、一三〇年余りに及ぶ歴史を通じて、我が同志社は、このような主の招きに応える形で無数の有名・無名の人材を輩出してきました。牧会宣教の現場で、福祉の現場で、さらには政界やビジネスの世界においても、同志社人に共通する認識は、こころ・からだを病む人びとへの共感、痛む人びとへの共感と働きに、主からの招きを信じて全身全霊を投入しようとする思いでした。校祖新島の祈りは、一三〇年を経た今日においても、いかなる立場であれ、同志社人としての私たちの心のうちに脈々と息づいているのです。また、そう信じて歩みたいものだと思えるこのごろです。

二〇〇七年十一月七日 同志社スピリット・ウィーク
京田辺チャペル・アワー「奨励」記録